

ブレイクと近代日本

——柳宗悦と大江健三郎の場合——

松 島 正 一

今日は「ブレイクと近代日本」という題でお話しますが、副題を「柳宗悦と大江健三郎の場合」とつけておきました。「近代日本」という言葉は実に漠然としていますが、すでに故人である柳宗悦と、ノーベル文学賞を受賞なさったばかりの作家の大江健三郎、この二人の日本人とイギリス人のウィリアム・ブレイクとの関係、を話してみたいと思います。

ところで、イギリス・ロマン派学会が本年（平成六年）、創立二十周年を迎えるにあたって、昨年の秋ごろから、私自身もその一人である企画委員会が、全三回九人による記念講演会の企画にあたりました。その企画の話の過程で、大江健三郎さんに是非お話をして頂こうということになりました。大江さんは（大江さんと呼ばしていただきますが）、ブレイクを核（コア）とする一連の小説を発表しておられますので、ブレイクと作家大江健三郎との関わりを話していただければ、我々イギリス・ロマン派の研究者にとっただけでなく、大江ファンの聴衆の方々にも実に興味あるものになると確信したわけであります。

大江さんが、我々の学会のために来て話してくれるはずだというのは、私の確信というよりも信仰そのものであります。といいますのも、かれこれ十年前になりますが、日本英文学会というところで、当時私は「大会準備委員」を仰せつかり、シンポジアムの企画を立てる役をしておりました。その時に私は、「ロマン主義と現代批評」というテーマを考え、東大の先生でいらっしゃった山内久明さんに司会をお願いすることになりました。

山内さんはイギリス・ロマン派学会の理事会員でもあります。日本人としては初めてケンブリッジ大学で英文学の博士号をとられた方でして、先輩として非常に尊敬している方です。その山内さんは、大江さんの古い友人でして、あの「新しい人よ眼ざめよ」の二番目の作品である「怒りの大氣に冷たい嬰兒が立ちあがって」のなかで、「駒場で同級であり英文科の大学院に進んで、当時女子大の講師をしていたY君」として登場するのが実は山内さんなのです。その山内さんのお骨折りで、日本英文学会は関西学院大学で催されたにもかかわらず、大江さんはシンポジウム講師として、遠路はるばると出席してくださいました。

司会者としての山内さんは、大江さんの他に、評論家の磯田光一さん、東大教授でロマン派学会の副会長でもある上島建吉さん、東大教授の出淵博さんという豪華なメンバーを講師に集めてくださいます。シンポジウムは立ち見が出るほどの歴史的な大盛会でした。

御存じの方も多いことと思いますが、磯田さんの修士論文はワーズワスでして、ロマン主義をどちらかというとナショナリズムをその中心にすえて捉える磯田さんと、それとは反対の立場に立つ大江さんとの間にホットな論争もありました。シンポジウム終了後は、人気作家大江さんのサイン会となつてしまい、早く教室を

閉めなければと思っていた委員の私を、いらいらさせたことなどを懐かしく思い出します。

その後、一年ほどで磯田さんが急死され、葬儀場で大江さんをお見かけしました。たまたま、磯田さんは、私と同じ松戸市の住人です。葬儀場であった「松戸の火葬場」は、私にとっても縁のあるところでもありました。磯田さんには、亡くなる半年前に、家の近くの病院の前でお会いし、磯田さんが「今、恒例の人間ドックに入ってきたところだ」とおっしゃったので、「お元気で」といって別れたばかりでしたので、磯田さんの死には大きなショックを受けました。

このようなわけで、今回も、山内さんを通して大江さんにご都合を伺っていただければ、大丈夫、絶対に来てくださる、と思っておりました。しかし、まことに残念なことに大江さんは現在、「最後の小説」と言われている例の三部作に全身を打ち込んでいるので、申し訳ないがということで、断られてしまいました。

それで我々企画委員会のメンバーは、困ってしまいました。大江さんを、言葉は悪いのですが、「目玉」として考えていた我々の企画は挫折してしまいました。イギリス・ロマン派にブレイクを入れることは、現在では常識となっていますので、そのブレイクの話がない記念講演会も間が抜けています。そこで急遽、会員のなかからブレイク研究者として、私が話しをするはめになってしまいました。

記念講演会のプログラムができ、ポスターが各所に張られ、準備が着々と進んでいくなかで、大江さんのノーベル文学賞受賞という快挙がありました。大江さんのノーベル賞受賞は、日本人としてまた一個人としまして、実に嬉しいことであります。このようなわけですので、もし私のこの講演の題を御覧になって、大江さんのノーベル賞受賞に便乗したものと思っていらいした方があるとするなら、それは誤解であることがお解りいた

だけるものと思います。

どうも前置きが長くなりました。さて、ウィリアム・ブレイクは今では、イギリス・ロマン派の詩人・画家として知られていますが、その職業は彫版師、つまり職人でした。現在では名も忘れられてしまった芸術家のデザインへの彫版や、著作への挿絵にブレイクの名が付され、それで世間に知られていたにすぎませんでした。芸術家としては、生きているときにはまったく無名の芸術家で、いや、芸術家とはだれも思わず、その絵や詩は同時代の人々からは理解されず、狂人の産物とみなされる始末でした。

ブレイクが世に知られなかったということには、彼の書物の出版形態の特殊性があります。ブレイクの書物は手作りによるプライベイト・プレスのかたちで制作され、彼はそれを彩飾印刷本と名づけました。「彩飾」という言葉からおわかりのように、これは中世の写本に倣ったものです。中世の彩飾印刷本は、筆記者・写字者、細部に彩色する者、縁どりに模様を付ける者、金箔を塗り・磨きをかける者、などと各自の仕事が分担されていました。これはウンベルト・エーコ『薔薇の名前』の映画を観られた方は、修道院で書物を制作する場面があったことを覚えていることでしょう。中世では分担されていたこれらの作業を、ブレイクはまったく一人でやり遂げたのです。

日本では、明治二八年の大和田建樹『欧米名家詩集』以来、ブレイクはいろいろな形で紹介されてきましたが、その紹介は白樺派において頂点に達します。大正三年四月号の『白樺』はブレイク特集であります。白樺派は、学習院から東京帝大というコースをたどった人たちによる結社ですが、同人のなかでも柳宗悦がもつともブレイクに熱をあげました。

柳宗悦は、明治三二年生まれですから、全部で七百五十頁を越える彼の名著『キイリアム・ブレイク』が京都の洛陽堂から出版された大正三年は、彼は二十五歳でした。

本日、ここにこの書物を持つてまいりましたが、これは今から三十年前私が大学院の学生であつたころ、神田の北沢書店の古書部で購入したものです。確か二万円しました。余談ですが、私が大学を卒業したのが昭和四十年ですが、当時大学卒の初任給は二万円には達しませんでした。東洋レーヨン（現在の東レ）という会社が二万円を越える日本一の初任給を出す会社で、このことが世間の話題になり、東洋レーヨンに就職が決まった私の友人は、みんなから大いに羨ましがられたものでした。そう、大学院の学生の奨学金（日本育英会）は月額一万円でした。

とにかく、この書物の古書価は高額で、これを買おうか買まいか、一週間ほど迷つた末、それこそ清水の舞台から飛び降りるつもりで、買ったことを思い出します。その後、送られてくる古本屋のカタログを眺めては、この書物が値上がりするのを楽しみにしていましたが、確か二十万円近くまでいったように思います。現在では、筑摩書房から出版されている『柳宗悦全集』全三十二巻（二十五冊）の第四巻が『ブレイク』で、簡単に手に入るようになりましたので、古書価も低落いたしました。

柳宗悦の『ブレイク』はこのような調子で書かれています。第一章「久遠の人」は「永遠のベートーヴェンが、その形骸を地に棄てた年——同じ千八百二十七年に又一人の絶大な芸術家が永く天に帰つていった。夏八月十二日である。身は老いに悩みつつも彼は甦つた若者の様に彼が愛した「想像」（イマジネーション）の畫に最後の筆を染めた。題は「天帝」と云つた」。こう書き始められています。大体このような調子で、ブレイク

をだしにして著者柳宗悦の哲学が語られている書物、ということができるでしょう。

柳宗悦の「ブレイク」は大変な書物ではありませんが、残念なことに引用されたブレイクの原文に訳がありません。ブレイクの英語、とりわけ「預言書」と呼ばれている作品群は和訳がなければ、理解のしようもないわけで、これでは何のために著者はブレイクの原文を引用しているのかということになります。云いにくいことですが、この時点では、柳宗悦はブレイクの「預言書」を、あまりよく読めてはいなかったのでしょうか。これはなにも柳宗悦にとつて不名誉なことでもなんでもなく、これだけブレイク研究が進んだ現在においても、我々はまだ、ブレイクの「預言書」を正確には読めていないのですから。

柳宗悦は、大正十年「ブレイクの言葉」というブレイク作品からの翻訳のアンソロジーを出版します。この翻訳は柳宗悦の英語力を示した実にすぐれた仕事で、戦後文学を代表する埴谷雄高はこの書から、とりわけ「繋がれたユリゼン」の挿絵から、実に大きな影響を受けたと語っています。

その後の柳宗悦は、ブレイク研究を寿岳文章にまかせ、自分はホイットマン研究にむかいます。これは、昭和六年一月から昭和七年十二月まで月刊で刊行された全二十四冊の「ブレイクとホイットマン」に結実します。柳宗悦はその後、民藝運動に全生涯をかけることになりましたが、彼がブレイクから学んだことは、民衆の立場からものを見ることの大切さでありましょう。「民藝」という言葉は、彼の新語ですが、彼の民藝運動はその実践といえましょう。

柳宗悦との関係では、一人のイギリス人を忘れることはできません。バーナード・リーチという人です。リーチはロンドンの美術学校で、そこに留学していた高村光太郎と友人になり、光太郎に彼の父親、光雲宛の紹介

状をもらって、一九〇九年来日します。高村光雲というのは、あの上野の西郷さんの銅像を作った人です、といったら光雲に失礼になるでしょうか。一九〇九年は明治四十二年にあたりますが、柳は二十歳、リーチは十二歳でした。また、この年に『白樺』発刊の準備がされ、翌明治四十三年に『白樺』が創刊されます。

リーチと柳宗悦とは親しい友人となり、リーチは彼にイエーツの編纂した『ブレイク詩集』を貸してくれます。この詩集はミューズ・ライブラリー（詩神文庫）という文庫本の大きさの本ですが、このテキストで柳宗悦は『天国と地獄の結婚』を読みます。

白樺派の人々と親しくなり、結局、陶芸の道に進むことになったリーチは、あの益子焼を世界的に有名にした浜田庄司と出会います。英国に帰ったリーチは、セント・アイヴスに窯元を開きます。セント・アイヴスという町は、長靴の形をしたコーンウォール半島の先があり、昔ロンドンに住んでいた頃、パディントン駅から夜行列車で出かけたことがあります。セント・アイヴスは港町ですが、昔から芸術家の集まる町として知られているところです。

リーチが亡くなったのは一九七九年でしたから、私がセント・アイヴスを訪れた一九七七年当時は、まだ彼は生きていたのですから、今にして思えば、お会いしておけばよかったと後悔しています。ただ、若かった当時の私は、紹介もなくリーチさんを訪れることに躊躇し、セント・アイヴス近くの、ヴァージニア・ウルフの『燈台へ』のモデルの燈台と、地の果てランズ・エンドを見て帰ってきてしまいました。

イギリス本国においても、まだほとんど評価されていなかったブレイクに全身全霊をささげて取り組んだ柳宗悦の功績は、実に大きいものと言わなければなりません。その後、ブレイク研究は、本国だけでなく日本に

おいても進みますが、柳宗悦のように丸ごとブレイクを掴み取る、このような態度が研究者に欠けているようにおもいます。柳宗悦以後のブレイク研究は、寿岳文章、山宮允、土居光知などのすぐれた仕事がありますが、柳宗悦の持っていたブレイクへの熱っぽい傾倒は、消えてしまったように思います。

ブレイクに関して、こういう状態が長く続いていました。それは戦後に英文学研究が自由になっても変わりませんでした。そういうなかで、ブレイクを自分の作品に積極的に利用し始めた作家に、大江健三郎がおります。時間もなくなってきましたので、次到大江健三郎とブレイクの話に移りたいと思います。

大江さんは東大の仏文科の学生であった二十三歳の時に、『飼育』で芥川賞を受賞したことはよく知られています。当時、学生作家の誕生は社会的な事件であっただけでなく、文学に志す青年に「大江さんの後に続け」という雰囲気をもしました。これは昭和三十三年のことで、私はこの時高校二年生でした。私自身も東大の仏文科に行って作家になろう、これが将来の目標でしたから、これだけでも大江さんの影響がどれほど強かったか、おわかりのことと思います。

大江さんは、石原慎太郎、開高健、江藤淳らと同世代の作家といわれますが、これらの人たち、なかでも大江健三郎の「影響の不安」のもとで、文学に志す人がどれだけ翻弄されたか、今の若い人たちに想像がつくでしょうか。亡くなった阿部昭、また最近テレビの世界から文壇に殴りこみをかけてきた感じの久世光彦などの作家は、あまりにも早く有名作家になってしまった大江さんの影のもとで、「遅れてきた作家」といつてもいいでしょう。つまり、大江さんの後では、大江さんと同じようなものは書けないわけです。

また、大江さんの後に続けということで、東大では福田章二、柘植光彦などの「学生作家」が誕生しました。

昭和三十三年、『喪失』で中央公論新人賞をとりデビューした福田章二は、長い沈黙の後、昭和四十四年、庄司薫と名前を変え、『赤頭巾ちゃん気をつけて』でベストセラー作家となりました。福田氏の奥様は有名なピアニストの中村絃子さんです。文芸学生賞をとった柘植光彦は、小説を書くことをやめ、専修大学の国文科教授で著名な近代文学研究者となっております。ついですが、大江健三郎の書誌を最初に作成したのは、柘植さんです。

今回、大江さんのノーベル賞受賞とともに、大江さんの家庭の事情もいろいろと明らかになってしまいました。大江家には光さんという障害のある息子さんがいます。このことは、大江さんの『個人的な体験』の読者には「頭部に異状のある新生児」として周知のことでした。

『個人的な体験』の作者は、主人公バードに「確かにこれははく個人に限った、まったく個人的な体験だ」と語らせていますが、この作品は大江家に障害児が誕生した話です。この作品で、作者はブレイクの「地獄の格言」のなかの一つの格言“*Sooner murder an infant in its cradle than nurse unacted desires.*”を引用し、日見子（＝卑弥呼）にこう訳させています。「赤ん坊は揺籠のなかで殺したほうがいい。まだ動きはじめてい欲望を育てあげてしまうことになるよりも」。これが大江さんの訳ですが、後に「ご本人も認めているように、これは誤訳ですね。意図的な誤訳というよりも、たんなる間違いです。『実行しない欲望を胸に抱いているくらいなら、揺籠のなかの幼児を殺せ』、こう訳すべきでしょう。ブレイクの主張は、人間は己の感じる欲望に正直に従えということなので、赤ん坊を殺せと言っているわけではないのです。

『個人的な体験』が出版されたのは、一九六四年の夏休みのことでした。当時、大学の四年生であった私は、

町の本屋に一週間ほど通って立ち読みで読んでしまった実に懐かしい小説ですが、こんな話はまさに「個人的な体験」（“a personal matter”）にすぎないものです。確かこの年は、柴田翔の「されどわれらが日々」の出版年でもあったように記憶しています。

『個人的な体験』のなかには、日見子の言葉として、フルシチョフの核実験再開の話も出てきますので、核時代に生きることの意味も問われているわけです。この小説のなかには「まあ、生まれてこないより生まれてくるほうがよかったかどうか、はっきりはわからない時代なんだから」と、私大の教授で主人公の義父の言葉があります、その時はわからなかったのですが、今にして思えば、これは仏文の渡辺一夫先生の口調です。

ブレイクのテーマの一つに「失われた子ども」がありますが、この作品にもそのテーマがみられます。また日見子は日本神話の女性、卑弥呼でもありますから、ここに大江文学のテーマでもある、女性的なるもの「治癒力」をみることもできるでしょう。主人公バードは息子と家庭を捨てて、恋人日見子とアフリカへ脱出しようとするのですが、結局それはかなわず、主人公が現実を引き受けて生きていくということで、この小説は終わります。

『個人的な体験』について、東大の仏文科の同窓である蓮見重彦は、「彼（＝大江健三郎）は、『個人的な体験』の執筆を通じて、『個人的な体験』なるものがたやすく言葉にはなりがたく、しかも、いわゆる私小説が、『個人的な体験』とはおよそ無縁のごく一般的な事態しか描きえないという文学的な現実と遭遇したのである。それは、自分を特殊なものと感じることが、ごく退屈な一般的現象にすぎぬという事実の発見だといってもよい。」と述べていますが、これは至言です。

さて、大江さんは一九八三年、『新しい人よ眼ざめよ』を発表します。この作品は七編から成る短編集ですが、『新しい人よ眼ざめよ』というタイトルは、“Rouze up, O Young Men of the New Age!”と、ブレイクの『ミルトン』からとられたものです。その他「怒りの大氣に冷たい嬰兒が立ちあがって」など、七編すべてのタイトルがブレイクの作品からとられています。

『個人的な体験』から『新しい人よ眼ざめよ』の間には、『ヒロシマ・ノート』や『沖繩ノート』などのすぐれたルポルタージュがありますし、『万延元年のフットボール』『洪水はわが魂に及び』『同時代ゲーム』などの大作がありますが、正直いって私の関心は大江さんから離れていたといつていいでしょう。この時期は、私にとつての三十代で、結婚をし子供を育て、またイギリスに留学したり、とにかく生活に追われていたといふことがあります。しかし、この期間の大江さん自身も作者として、文学的に読者を見失ってしまったのか、そんなことがあったように思われます。

『新しい人よ眼ざめよ』を構成する短編が順次、雑誌に発表され、それらを読むなかで私は再び大江さんに出会ったという、嬉しく、懐かしい気持ちになりました。『個人的な体験』を読んだころ私自身は、卒業論文にブレイクを選びましたが、自分がブレイク研究家として人生を送るようになるとは夢にも思っていませんでした。

『個人的な体験』で誕生した息子さんがいま、いま二十歳になりました。「いま息子との生の過程とブレイクをかさねての短編集を書きつづけて、そのしめくくりの作品を、息子の二十歳の誕生日に向けて完成しようとして」、これは大江さんの言葉です。

「新しい人よ眼ざめよ」は、ブレイクの詩の引用から成立しています。ブレイクの詩は作者によって自由に訳され、また原文のまま引用されます。作品の最後はブレイクの引用「惧れるな、アルビオンよ、私が死ななければお前は生きることができない。／しかし私が死ねば、私が再生する時はお前とともにある。」で、自分と息子との世代交代を願って終わります。

自分と息子との世代交代は、ブレイクの「知の旅人」という不思議な詩を用いた「罪のゆるし」の「あお草」という短編のテーマでもあります。「知の旅人」は「男の子」と「年老いた女」をめぐるブレイクのシンボリズムですが、「元氣を出して、しつかり死んでください!」と、ヒカリさんはお祖母さんに言います。作者は「ヒカリ」、「僕」、「祖母」のサイクルのなかで、ヒカリは「あお草」を飲まなくていい人間、自分は媒介者、大江さんの言葉では「壊す人」と位置づけています。

「懐かしい年への手紙」で、大江さんの関心は、ブレイクからダンテに移ります。ブレイクからダンテへ、この軌跡はブレイク研究者にはよく理解できます。ブレイクは四十歳を過ぎてからイタリア語を学び初めます。そしてダンテ「神曲」への挿絵の仕事が晩年のブレイクの仕事となります。しかし、これは未完のまま、ブレイクはこの世を去ることになります。

ダンテの「神曲」は、御存じのように、ダンテが師ヴェルギウスに導かれて、地獄、煉獄、天国とまわる話です。「懐かしい年への手紙」の語り手／書き手である「僕」は、都会に住む人間でKちゃんと呼ばれていますから、大江健三郎と考えるとよいでしょう。それに対して、森のなかの、谷間の村で、ダンテを読むギョー兄さん、この二人の関係は、ダンテとヴェルギウスの師弟関係に相当します。また、父親（僕）と息子（イーヨ）

との関係が、若い父親と幼児（少年）、中年の父親と障害が明らかな青年、といったように、それぞれの関係が描かれています。つまりこの作品が、作者自身の過去の作品への批評となっている点が、とても興味深く思われます。

大江さんはこの作品で、ギー兄さんという実にユニークな人物を創造します。最初はこんな人がいたのかしらと思いつつ読み進めていきましたが、こんな言い方は失礼ですが、四国の山のなかで、ダンテを原文で読む人がいるはずはありません。ギー兄さんは、大江さん自身でもあるのです。

四国の故郷の谷間にユートピアを建設しようとするギー兄さんの試みは、さまざまな理由によって挫折します。都会に生活する作家であるKちゃんは、四国の「暗い谷」に帰らなければと思いつつ、それを果たせずに関わります。しかし亡きギー兄さんに書く手紙、それがこの作品でもあるのですが、その手紙を「生の終わりまで書きつづける」ことが、僕の使命となるのであります。

「最後の小説」といわれる『燃えあがる緑の木』は、イエーツです。ブレイク・イエーツ・ダンテの系譜は、私にはよくわかります。先ほど述べましたように、ブレイクの詩集を編纂して、ブレイクを世に知らしめたのはイエーツでした。

さて最後に、大江さんのノーベル賞受賞記念講演についての感想を少しばかり述べさせていただいて、私の話を終わりにしたいと思います。

ノーベル賞の受賞記念講演「あいまいな日本の私」は、英語（“Japan, the Ambiguous, and Myself”）でなされましたが、この英文は『朝日イブニングニュース』に掲載されています。実にすばらしい英文ですが、

英訳をなさったのは山内久明さんです。山内さんにお聞きしたところでは、海外からファックスで送られてきた大江さんの原稿は、それを判読するだけでも大変で、まず全文を清書してから翻訳にとりかかったそうです。大江さんの講演の題「あいまいな日本の私」（“Japan, the Ambiguous, and Myself”）が、二十六年前にノーベル賞を受賞した川端康成の「美しい日本の私」（“Japan, the Beautiful, Myself”）のバロディであることは明らかです。日本文学における川端康成の系譜、つまり谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫などのライン、つまり和文脈ですが、それに対して大岡昇平、安部公房、大江健三郎本人につながる欧文脈の人間として、自分は川端康成には与するわけにはいかない、と大江さんはいうのです。そして、ここから大江さんの戦後民主主義擁護、戦後憲法を護るという姿勢がうちだされるのです。

大江さんの講演では、世界中から多くの文学者、またその引用が挙げられています。イエーツに関しては、彼自身もその一員であったアイルランド上院で、提出された決議案演説「われらの文明は氏（＝イエーツ）の力ゆえに世界に評価されるだろう・・・破壊への狂信から人間の正気を守る氏の文学は貴重である」が引用されています。イエーツがノーベル文学賞を受賞したのは一九二三年、彼が五十八歳のときでした。この時、トマス・マンも候補だったそうですが、まだ『魔の山』が完成していなかったので（完成はその翌二十四年）、イエーツが受賞となったといわれています。マンもその後、一九二九年に受賞しましたので、これはこれでよかったでしょう。

一九三〇年イエーツが異郷の地フランスで亡くなったとき、W. H. オーデンは「イエーツを追悼して」（“In Memory of W. B. Yeats”）という詩を書いています。詩は「彼は冬の最中に消えた」（“He disappeared

in the dead of winter:”と始まります。この詩のなかで、オーデンは詩人とは「不幸の恍惚のなかで人間の不成功を歌う」存在と規定しています。大江さんの愛読書である『オーデン』の深瀬基寛の訳を用いますと、詩人とは「人間の蹉跎を悲嘆の歓喜で歌う」（“Sing of human unsucccess/In a rapture of distress:”）^{（一）}、深瀬さんは訳しています。

イエーツは、五十八歳でノーベル賞を受賞した後、詩人として大きく変貌します。死後に出版された『最後の詩集』はそれを証明しております。なりふり構わぬ態度で人生そのものにおつかっていくイエーツの姿は、まさに凄絶であります。

大江さんは小説を書くことをやめて、アメリカの大学でスピノザを研究するとかいう噂ですが、そんなことをおっしゃらないで、イエーツに倣ってもう一回、いや一回といわずに何回でも、大きく変貌を遂げて欲しいと思うのであります。これは、大江文学の読者としてお願いということにとどまらず、大江さん個人としても、イエーツの例をだすまでもなく、文学者としての責任でもあるのではないのでしょうか。

これで、私の話は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（付記）

本稿は、平成六年（一九九四年）十二月十七日（土）『イギリス・ロマン派学会』創立二十周年記念講演会』（早稲田大学 小野講堂）での講演のテープを活字にしたものである。

大江健三郎氏のノーベル文学賞についての事実を記しておく、

（二）一九九四年度のノーベル文学賞は十月十三日大江健三郎氏に決まった。

（二） 大江氏の記念講演は十二月七日ストックホルムのスウェーデン・アカデミーで英語で行われた。講演は約五十分であった。

（英米文学科 教授）